

令和4年度 事業報告書

この事業は独立行政法人福祉医療機構の助成金で実施しました。



特定非営利法人 蜘蛛の糸

1.当法人を拠点とした県北、県南、日本海側の3地域と連携した相談活動事業

COVID-19は、生活困窮者や引きこもり状態にある人々にも負の影響を与えているため、悩みの種別に関係なく相談する必要がある。しかし、相談希望者が蜘蛛の糸を利用するためには、時間や移動にかかる費用がかかるため相談するためのハードルを上げている。この課題を解決するために3地域の相談活動事業団体と連携し、96名へ相談を行った。本報告書では、相談事業を利用した人の基本属性及び抱える悩みや自殺リスクについて報告する。

*1 個人情報保護の観点から匿名化して解析を実施した

*2 本データは利用者の累積データであることに留意する必要がある

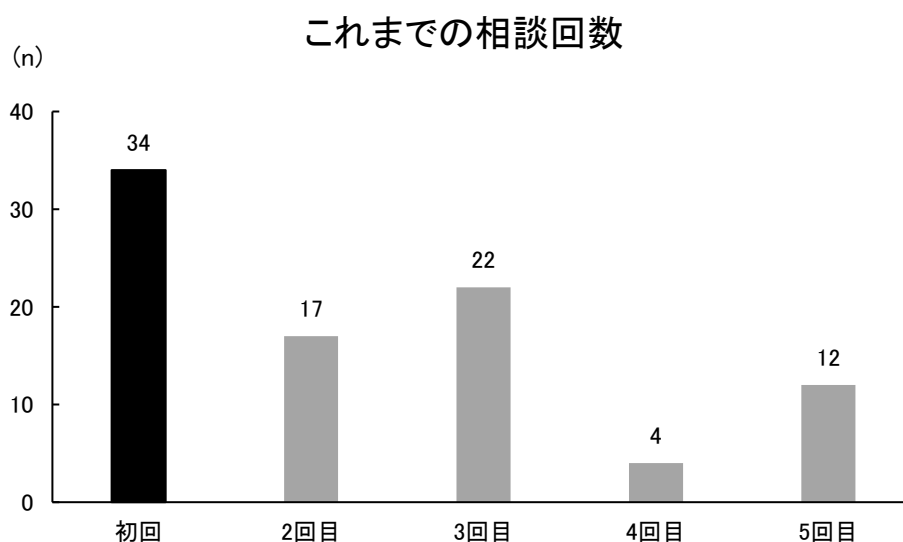


図1 これまでの相談回数

- 本事業を行うことで新たに34名の相談者にリーチすることができた。また、5回目以上を利用した人は12名であり、ハイリスク者への対応も実施できている。

相談会を知った経緯 (N=96)

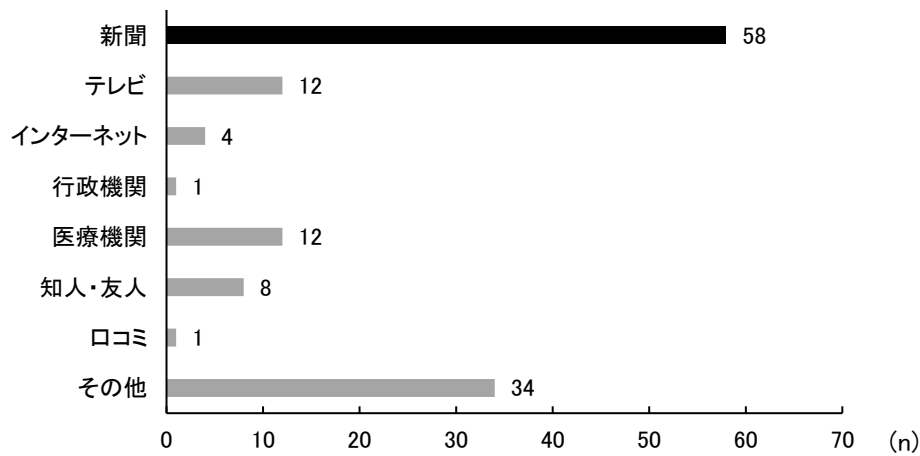


図2 相談会を知った経緯

- 本事業の相談会を知った経緯は、新聞であると回答した人が最も多かった。その他に回答した人は、相談機関の紹介や当方人の LINE 相談からの紹介が含まれていた。

居住している市町村 (N=96)

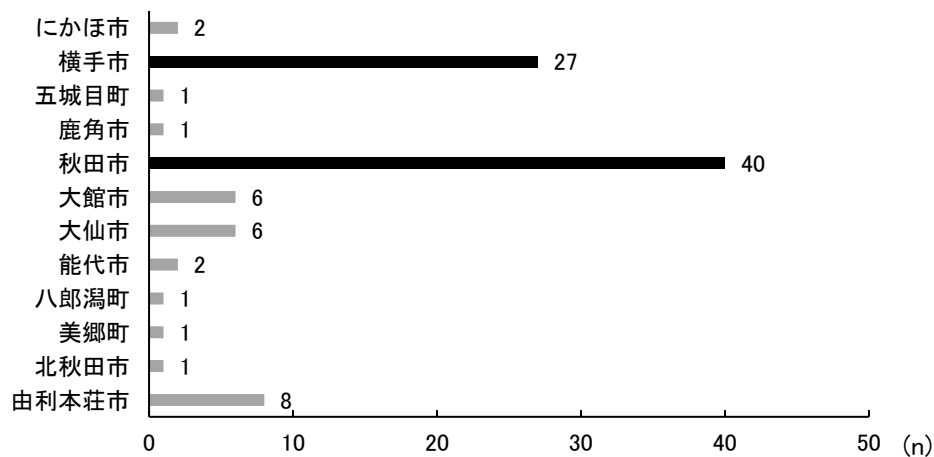


図3 居住している市町村

- 対象者の居住地は、当方人の拠点がある秋田市が最も多く、次に横手市が多かった。移動距離の負担を少なくすることが、相談事業の利用率を向上させる可能性が高いため、拠点の数を増やすことが次年度の課題である。

性別(N=93)

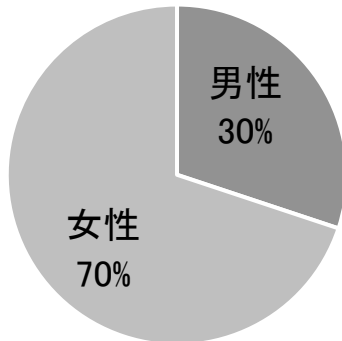


図4 性別

利用者の年齢 (N=93)

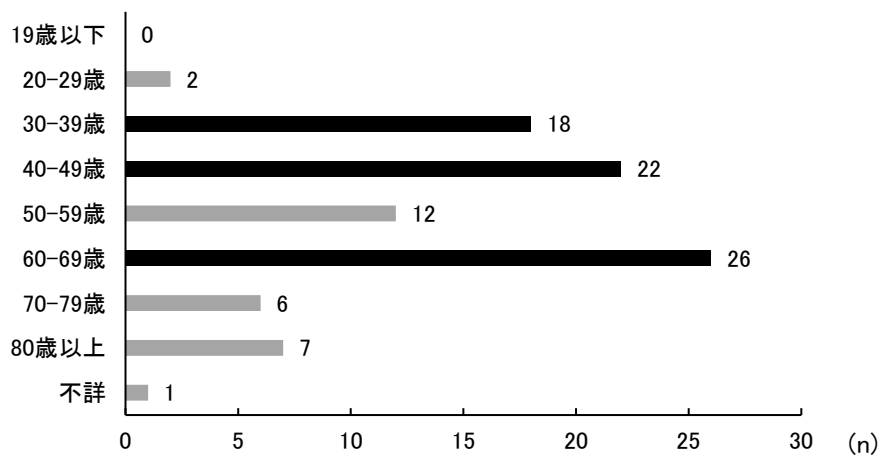


図5 利用者の年齢

回答者の性・年齢 (N=92)

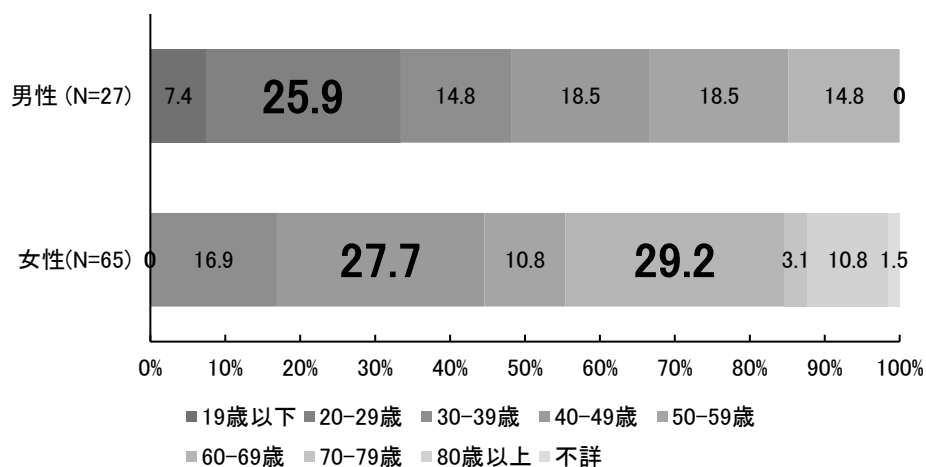


図6 利用者の性・年齢

- 利用者は、女性に多く、30-39歳、40-49歳、60-69歳が多かった。
- 性・年齢別では、30-39歳の男性や40-49歳、50-59歳の女性の利用が多かった。

相談者の種別 (N=96)

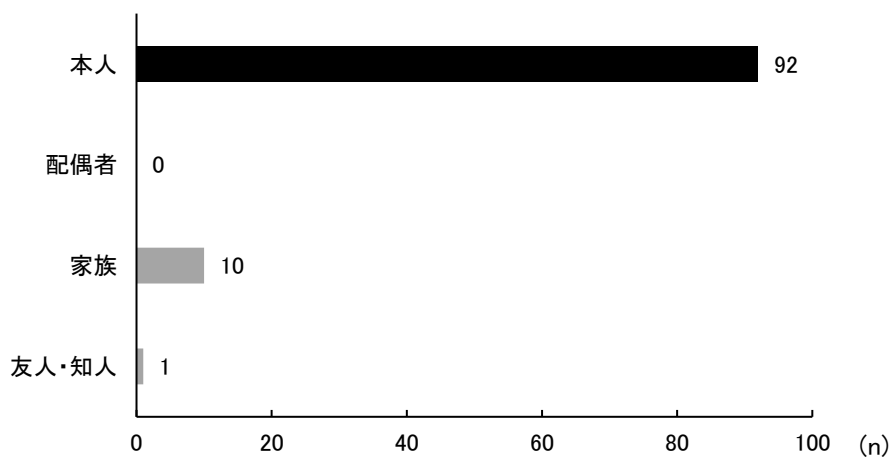


図7 利用者の種別

- 利用者は本人が多かった。

相談内容:複数回答 (N=93)

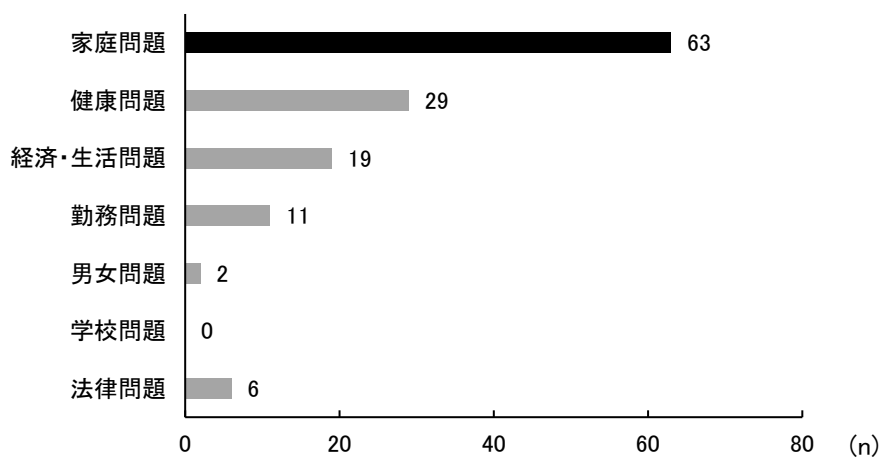


図8 相談内容

相談履歴:複数回答 (N=96)

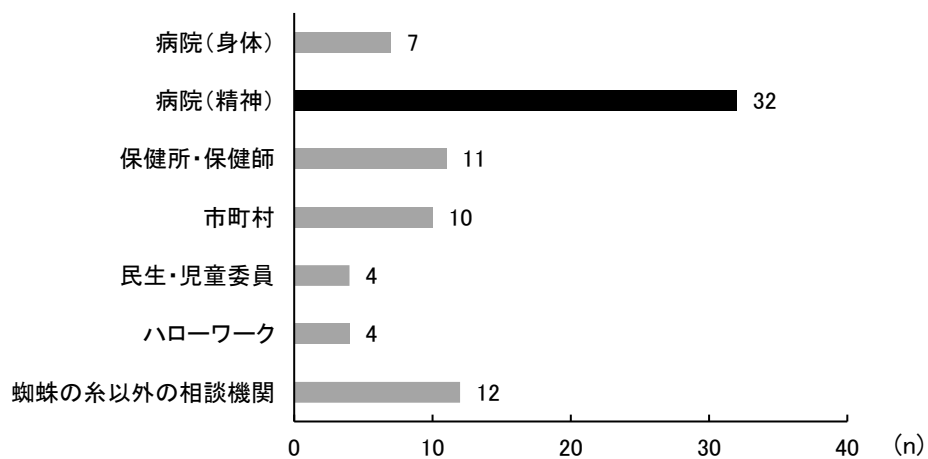


図9 蜘蛛の糸以外の相談履歴

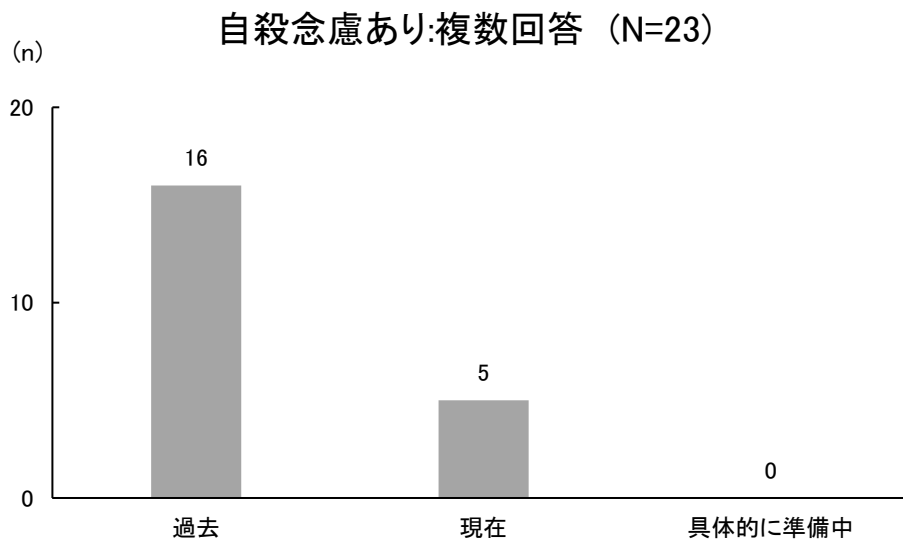


図10 自殺念慮を抱える人の内訳

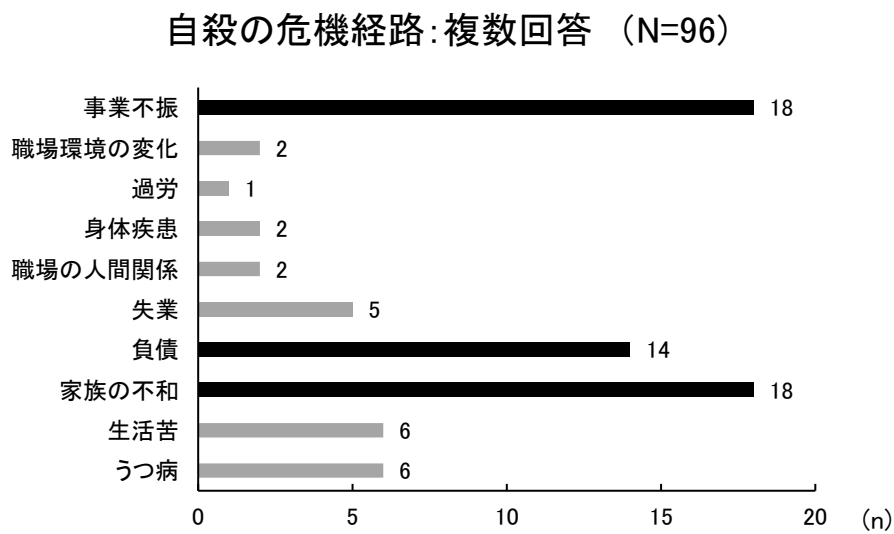


図11 自殺の危機経路

悩みを抱えている期間:複数回答 (N=47)

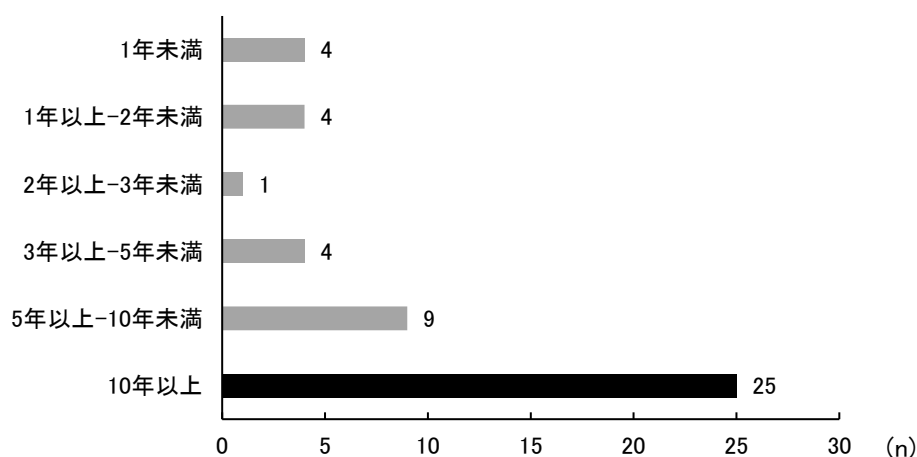


図12 悩みを抱えている期間

- 利用者は家庭問題や健康問題の悩みを抱える人が多かった。精神科を受診している人が健康問題について相談するケースが多い。
- 相談者のうち、23名は自殺念慮を抱いた経験があり、そのうち5名は現在も自殺念慮を抱いていた。一方で、具体的な自殺の方法を考えている相談者はいなかった。
- 自殺に至るまでは、様々な危機経路を通過すると言われている。利用者は、家族の不和、事業不振、負債を相談する人が多いため、今後はこれらの悩みの相談を受ける際に必要な相談スキルの取得が望まれる。
- 悩みを抱えている期間は、10年以上と回答している人が多く、解決しにくい悩みを有している可能性高い。

総括

相談事業の利用者は、0-39歳の男性や40-49歳、50-59歳の女性や精神疾患を罹患している人に多かった。利用者は10年以上悩みを抱えている人が多く、家庭問題や健康問題を抱えている人が多かった。また、新聞を閲覧して利用する人が多かったため今後は新聞を利用した普及啓発や悩みの種類に焦点を置いた支援者のスキルアップが求められる。

2. LINE 相談、電話相談、面談相談における相談者の緊急対応を目的にしたアウトリーチ事業

LINE 相談、電話相談、面談相談で対応した対象者に対して、緊急性が高い場合に25件のアウトリーチを行った。対応を行った25名に対して調査を実施し、当事者9名と養育者7名から回答を得たため、当事者及び養育者の実態を報告する。

当事者の年齢

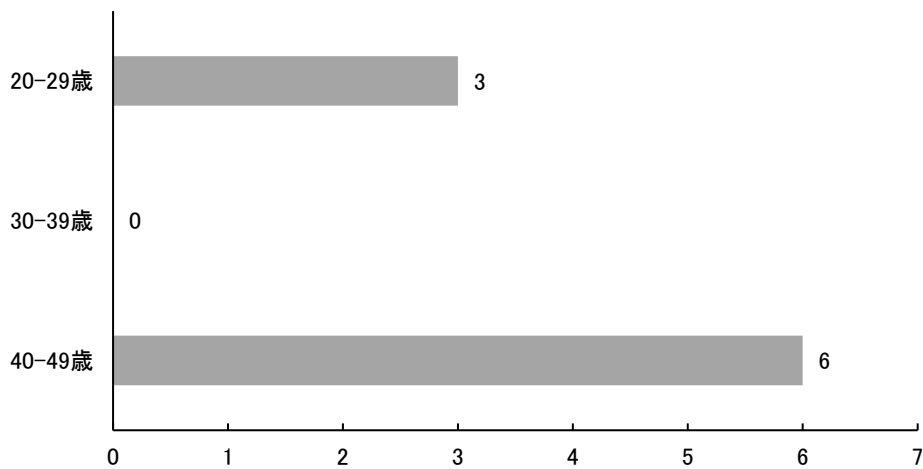


図13 当事者の年齢

婚姻状況

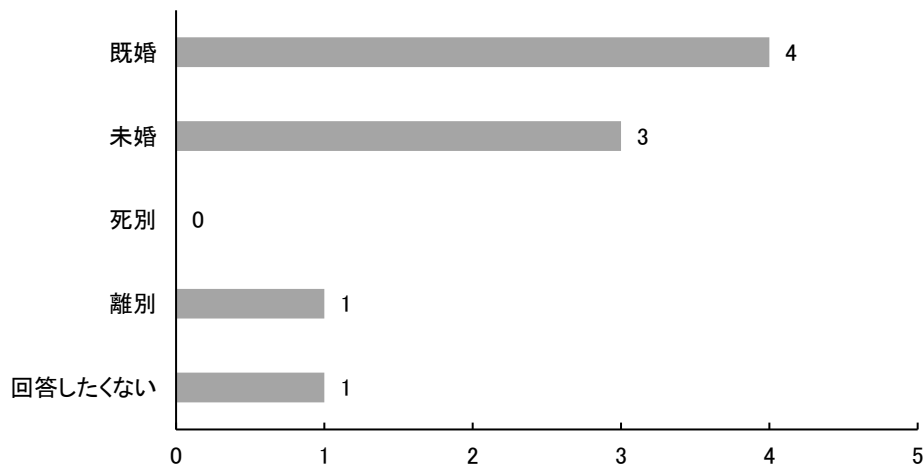


図14 婚姻関係

- 質問紙に回答した対象者は男性5名、女性4名であった。回答者の年齢は、20代及び40代であり、既婚者及び未婚者が多かった。

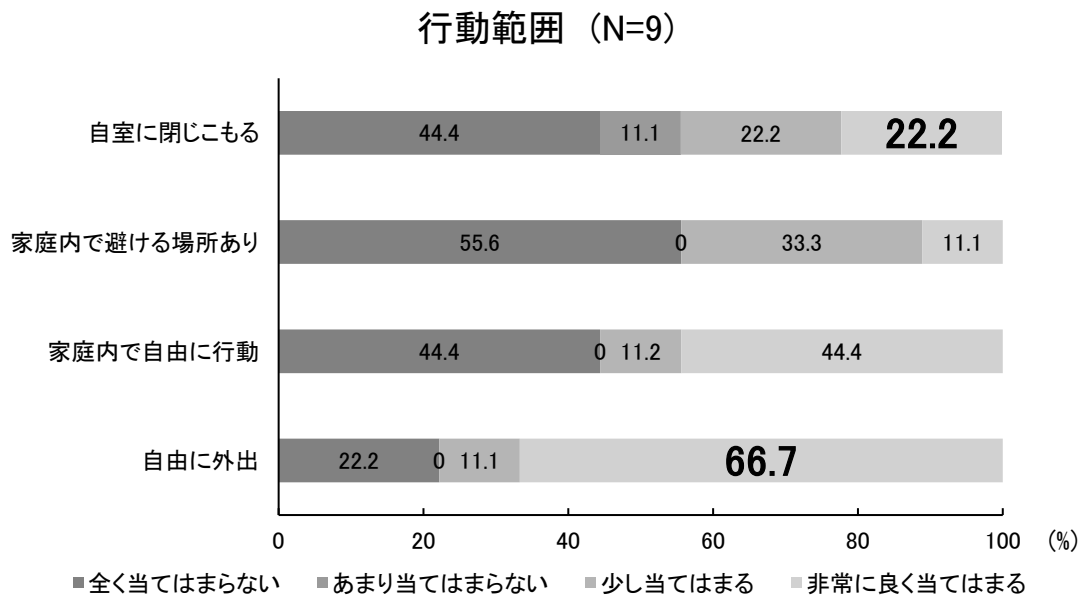


図15 行動範囲

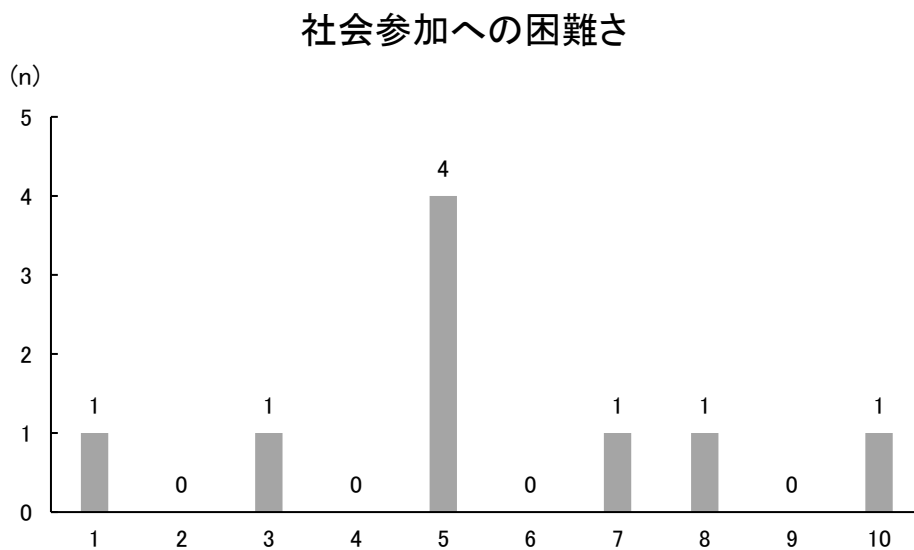


図16 社会参加への困難さ

- 行動範囲は、自室に閉じこもる人が 22.2%であり、自由に外出する人が 66.7%であった¹⁾。社会参加への困難さを感じている 7 点以上の方は 3 人であり、これらの人は自室に閉じこもっていると回答した人であった。

1)内閣府政策統括官. 若者の生活に関する調査報告書の質問項目を使用した。

<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html>

(閲覧日 2023 年 3 月 26 日 閲覧)

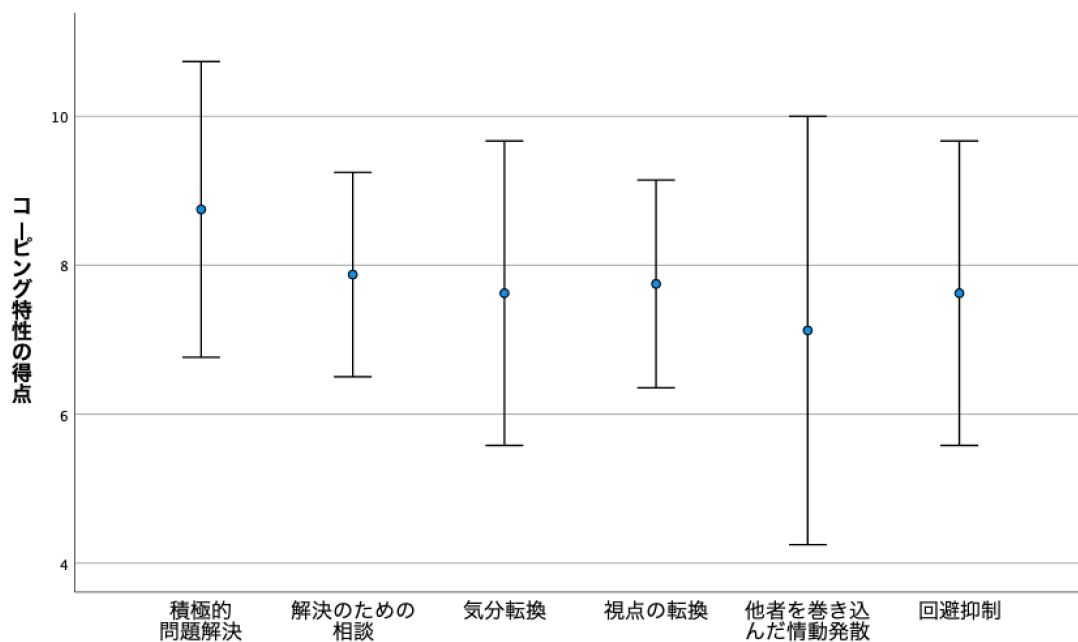


図17 コーピング特性

- 引きこもりの当事者が選択しやすいストレスの対処特性を明らかにするために、コーピング特性簡易尺度²⁾を用いて測定した。問題の責任を他人のせいにしたたり、八つ当たりを行う「他者を巻き込んだ情動発散」の得点や何もしないで我慢したり問題を先送りにしたたりする「回避抑制」の得点が一般集団と比較して高かった。

2) 影山隆之, 小林敏生(2016):心の健康を支える「ストレス」との向き合い方 -BSCP によるコーピング特性評価から見えること-, 東京, 金剛出版.

養育者の年齢

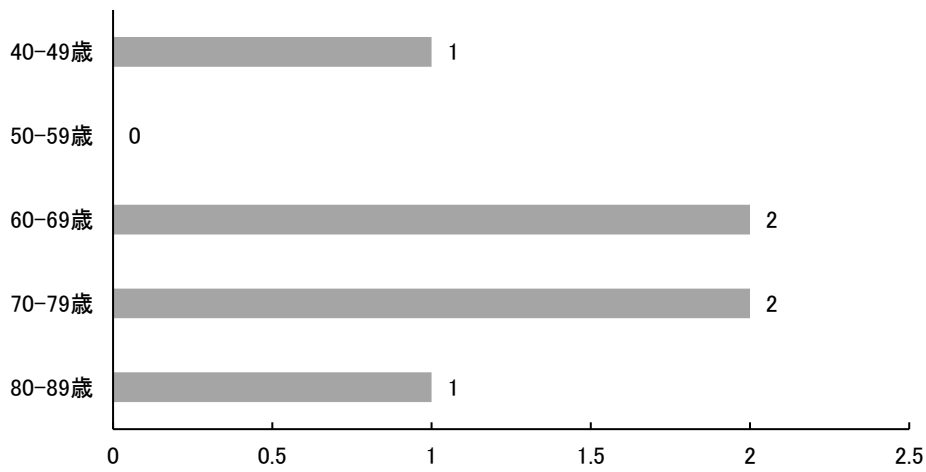


図18 養育者の年齢

養育者の婚姻状況

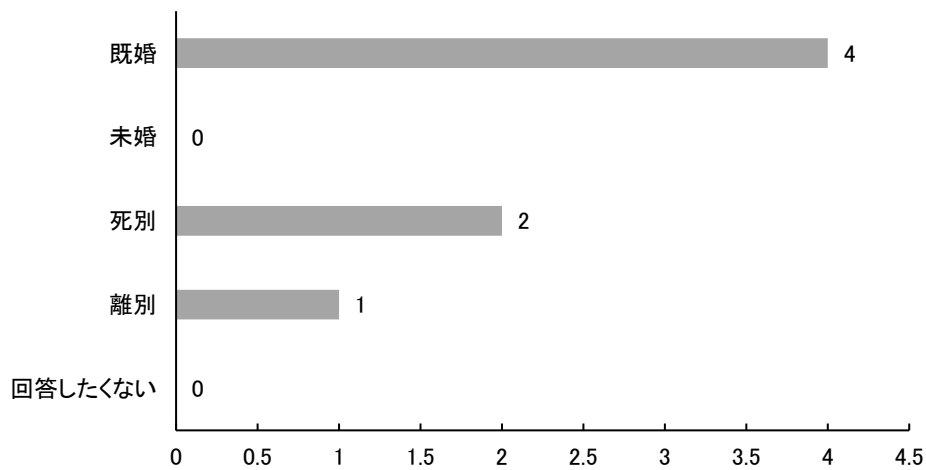


図19 養育者の婚姻届状況

- 質問紙に回答した対象者は男性1名、女性5名、無回答1名であった。年齢は、60代以降の占める割合が多く、既婚者が多かった。

当事者の年齢

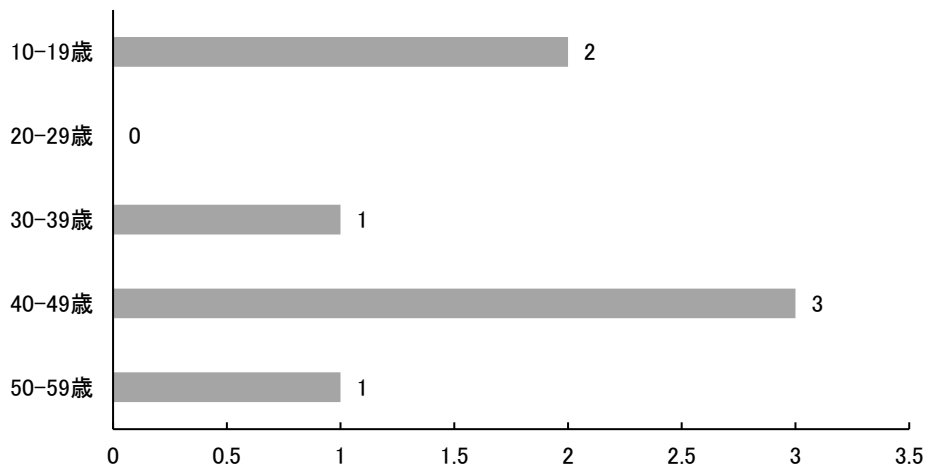


図20 当事者の年齢

行動範囲 (N=9)

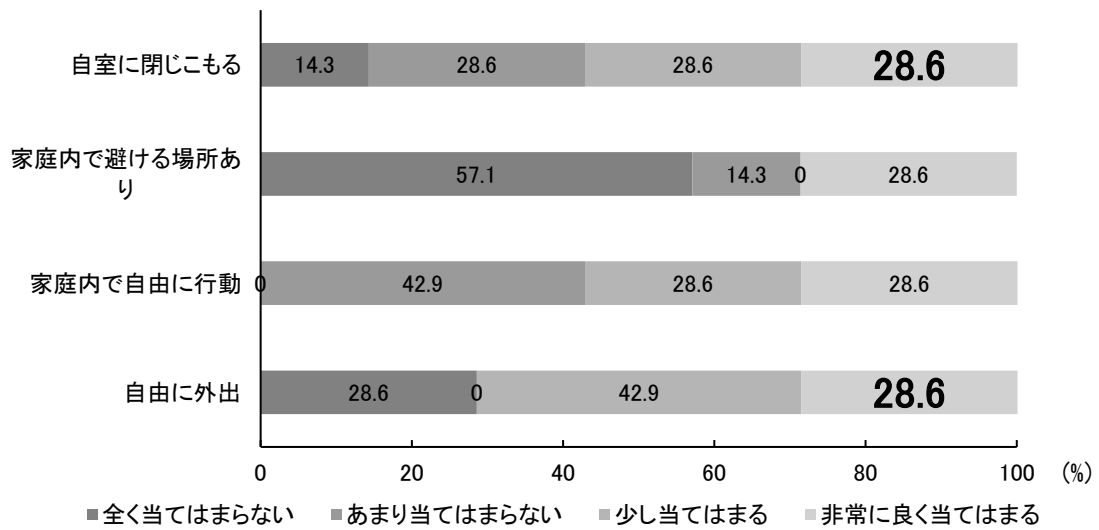


図21 養育者からみたひきこもり当事者の行動範囲

社会参加への困難さ

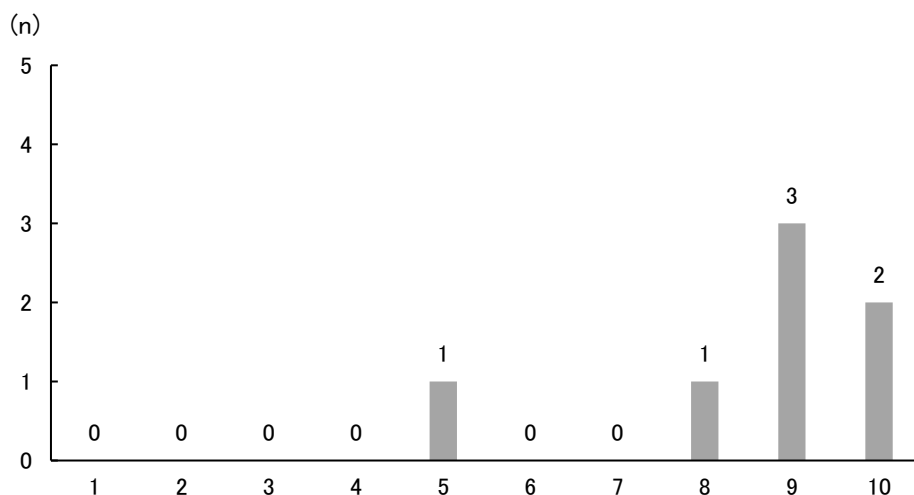


図22 社会参加への困難さ

- 現在、養育している引きこもりの当事者の年齢は、10代及び40代が多く、自室に閉じこもる、自由に外出する人の割合が同等であった。
- 当事者に対して社会参加への困難さを感じている7点以上の人々が、多くの割合を占めていた。

養育者のメンタルヘルス不調の有症率 (N=7)

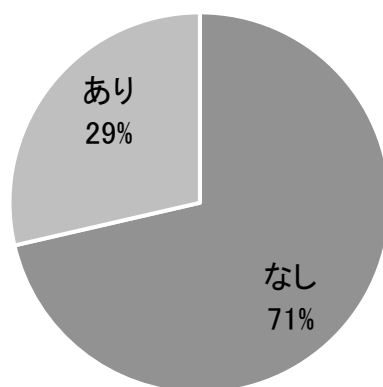


図23 養育者のメンタルヘルス不調の有症率

- 養育者のメンタルヘルス不調の有症率を明らかにするために Kessler⁶⁾を用いた結果、約30%の人がメンタルヘルスの不調(9点以上)の疑いがあった。

3) Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitohi et al. (2008). The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. International J of Methods in Psychiatric Research, 17, 152-158.

子どもの立場で物事を考える努力

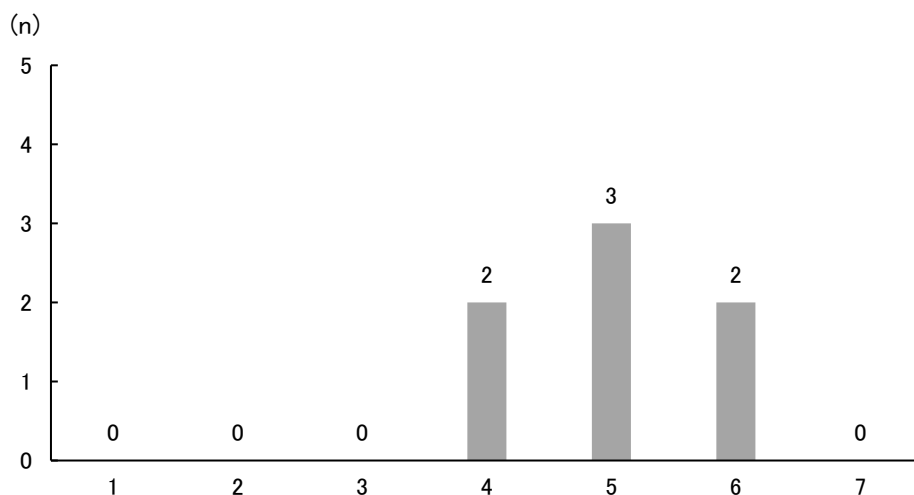


図24 子どもの立場で物事を考える努力

ありのままの姿を受け入れる

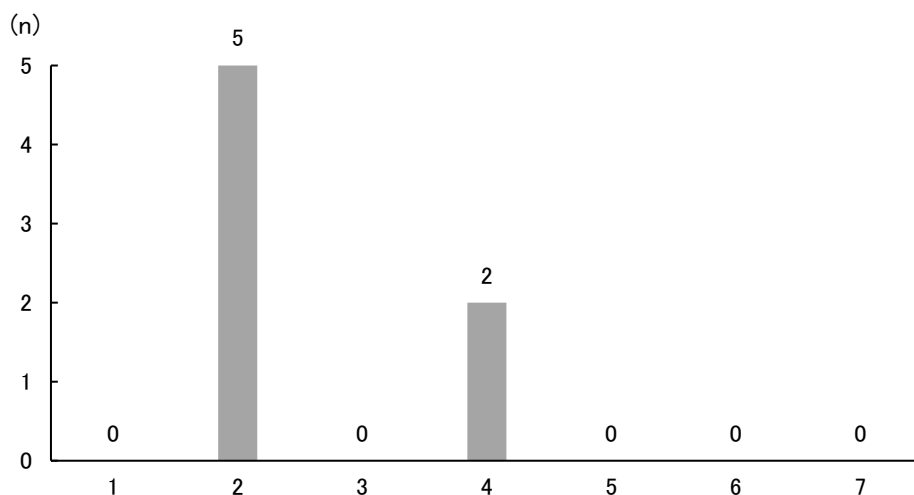


図25 ありのままの姿を受け入れる

- 子どもの立場で物事を考える努力をしていますか？と質問したところ、5 点以上の人が多い傾向にあった。一方で、「子どものありのままの姿を受け入れることができますか？」と質問したところ、2 点の人が多く、養育者としては、当事者の状況を受け入れることが難しいことが明らかになった。

総括

引きこもりの当事者は、「他者を巻き込んだ情動発散得点」「回避抑制」得点が一般集団と比較して高い。約 30%の養育者は、メンタルヘルス不調を抱えているため、支援者は養育者のメンタルヘルスに関わる支援も行う必要がある。

あきた自殺対策センター
NPO 法人 蜘蛛の糸

〒010-0921

秋田市大町3丁目2-44 協働大町ビル3階

Tel. 018-853-9759